

## 水環境・海域（５）（２-C-9-1～２-C-10-2）

水環境・海域(5)[2-C-9-1～2-C-10-2]は海底質でまとめたセッションであり、腐植物質、汚泥改良、PCB、トリブチルスズ化合物（TBT）、ダイオキシン 2 題の計 6 題の発表があった。

松下（大阪府環境情報セ）は、海底質から抽出した粗フルボ酸の XAD-8 樹脂カラムによる精製法の最適化を検討し、0.05M 塩酸と純水で洗浄する方法を見出した。これに対し、検討目的の不明確さ、腐植物質の“定義”との整合性などに関する質疑があった。

清水（三重県科技振セ）は、硝酸カリウムによる汚泥改良法を現場適用する際の課題に取組み、錠剤化が効果的であるが栄養塩の溶出が解消できないことを報告し、ORP 上昇原因、溶出速度の制御、効果の持続性について質疑が行われた。

玉田（神奈川県環科セ）は、東京湾底質コアの全異性体分析データを PCA、CMB モデル、PMF で解析して発生源を製品系と燃焼系に類別し、年代測定データに照らして時系列プロファイルを示すとともにモデルによるプロファイルの差から嫌氣的脱塩素化の進行を推定した。発生源解析に関し、発生源の種類を細分化すべき旨の意見などが出された。

石渡（横国大院）は、名古屋港底質で TBP の分解、脱着、巻き上げ溶出実験を行い、溶存・懸濁態濃度の変化から動態特性を考察して直上海水への経路別溶出量を算出した。巻き上げの際のプロペラ回転数、物質収支に適用した分解速度、溶出濃度の高さなどの質疑があった。

ダイオキシン類について、衣笠（若築建設）は、鉛直一次元の物質循環モデルを構築して覆砂による水質・底質改善効果の定量的な評価を試み、覆砂厚の増加や有機物含量の高い未汚染泥を用いることで効果的な溶出抑制が期待できるとした。覆砂厚等に関する質問が出された。

内藤（港空研）は、環境基準を超過した港湾の含有濃度と溶出濃度、強熱減量、異性体組成の違いに着目し、底泥と平衡状態にある水相濃度から溶出量を推定する方法を検討し、水域によって推定値に偏りが現れることを報告した。

（大阪市立環境科学研究所 福嶋 実）